



〈 連載 (158) 〉

水の都ベニスの客船たち



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授

池田 良穂

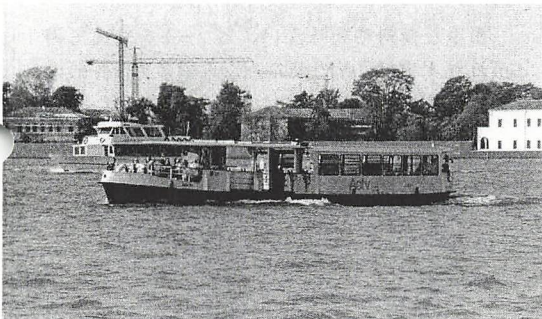
9 月にイタリアのベニスに1週間滞在した。ベニスにある海軍学校の校舎で開催された「国際船舶試験水槽会議」に出席するためである。この会議は、全世界の船舶試験水槽の研究者および技術者が、3年に一度集まって、船舶の性能を把握するためのいろいろな水槽技術についての情報を交換することを目的としており、かつて日本でも東京と神戸で開催されたことがある。神戸での会議の時には、筆者も、若い研究者として主催者の一員としてお手伝いした。3年前の前回の会議は、韓国と中国の共同開催としてソウルと上海で半分ずつ開かれ、そこで決まった技術委員会が3年にわたって作業をしてきた報告が、技術テーマ別のセッション毎でなされた。このセッションのいくつかを紹介してみると、船体抵抗、船体および海洋構造物の応答、操縦性、ウォータージェット、キャビテーション、極限運動と転覆など。それぞれの分野における最新動向、現在かかえている問題点、今後の対策等について報告がされ、それに対するディスカッションが熱く繰り広げられた。

さて、話は変わるが、ベニスのホテルの高さにはまったく驚かされた。観光都市であり、古い建物をそのまま使わなくてはならないという状況だから、ホテルの価格が高いのは覚悟していたが、主催者側がある程度押さえてくれていたホテルは軒並み1泊が2~3万円。筆者は、船の撮影のしやすい運河に面したホテルを選び、「窓から船が見える部屋を」とリクエストしたところ、「ハーバービューだと1泊5万円」という回答があり、やむなく部屋の窓から船を眺めることは諦めた。しかし、予約したホテルに到着して、部屋に入って驚いた。日本のビジネスホテルより狭い屋根裏部屋のような部屋で、トランク等を置くとほとんど身動きができないほど。この狭く暗い部屋で1週間を過ごすこととなった。

このようにホテル事情はよくないものの、ベニスは、船ファンにとっては魅力的な都市であり、筆者は1週間の間、船三昧の生活を堪能することができた。なぜならばベニスには船しかないからである。アドリア海の砂洲の上に作られたベニスは、い

くつかの島からなっているが、その中心部には列車も車は入ることができない。人々の移動も、荷物の輸送も、ごみの回収も、さらに葬式さえ船しか利用することができない。

人の移動には、ヴァポレットと呼ばれる水上バスが中心となる。ヴァポレットの船型には2種類あり、比較的静かな運河内を中心に運航するタイプの船と、島の外側の比較的波のある水域も走る凌波性能を向上させたタイプの船である。後者は、船首が高くなっており、船首からの波が打ち込みにくくなっている。ヴァポレットの路線は、ベニス市内をくまなく網羅するようになり、頻繁に運航されている。船内には座席もあるが、いつも込んでいるため立ったままの客の方が多い。運航するのは、操船する船長と、綱とりをする船員の2人。船付場を次々に寄りながら航海をする。



内海用ヴァポレット

筆者らは、1週間のフリーパスを入手して、このヴァポレットを縦横無尽に利用してベニスの中をまわった。特に、82番に乗るとクルーズ客船ターミナルと外航フェリーターミナルの近くを通るので、これには1日一回は必ず乗船するのを日課とした。

水上タクシーもまた人々の足として機能している。こちらはモーターボートタイプの小型船だが、ニス塗りの立派な木製ボートが多い。なかなか高級感溢れる船も多く、急ぎの時や荷物が多き時には重宝をした。



外海用ヴァポレット



貨物用小型船



ゴンドラ

最後に人の輸送機関として忘れてはならないのが有名なゴンドラ。主に観光客用に用いられており輸送機関とは呼べない感じもするが、中には運河の渡しとして定期的に運航されているものもある。この船には動力がなく、こぎ手が巧みな櫂さばきで船

を人力だけで自由自在に扱っている。このゴンドラの船型は左右非対称形状の非常に独特のものになっており、片方の舷で櫂を操っても、真っ直ぐに走るようにうまくできている。

ベニスとイタリア本土とは、砂洲の上に伸びる長い道路と線路で繋がれている。線路の終点が有名なサンタルチア駅である。駅を降りると、すぐに大運河に面しており、ヴァポレットの乗り場がある。また、車でベニス入りをするるとローマ広場のバスターミナルで降りるか、または広大な駐車場に車を入れることとなる。あとは、船だけが頼りとなるから嬉しい。

大型船の入る港には、ギリシアのパトラとの間を結ぶ大型旅客カーフェリーがほぼ毎日入ってくる。ただし、ここでフェリーから降りた車は長い橋をわたってイタリア

本土へと上陸することとなる。また、すぐ横にはクルーズ客船埠頭も完備され、筆者の滞在中にもたくさんのクルーズ客船が入港してきており、ベニスが地中海クルーズの起点港として機能していることが実感できた。さらに、河川用の客船の姿も多く見られた。ここを起点として、イタリア本土側の河川の観光をしているようだ。こうした客船にも、いずれ乗船してみたいものだ。



ベニスに入港する大型カーフェリー「ブルーホライズン」(元東日本フェリーの「ばるな」)

新刊紹介

気象ブックス013
台風と闘った観測船

にようむら よう
饒村 曜 著

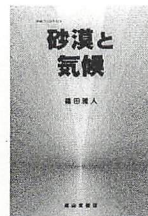
台風は、年間約27個発生し、そのうち平均3個が日本に上陸、ときに多大な被害を与えている。現在では、気象衛星からの観測によって、その災害規模はかつてとは比べものにならないほど減少しているが、そこに至るまでには多くの人たちの苦難と努力の歴史があった。

本書は、1912年のタイタニック号の海難事故から本格的に始まった海洋気象観測と防災対策、そのなかでも日本の台風災害の軽減に多大な貢献をした定点観測船の活躍を中心に描いたもの。

台風の通り道に船を置き、定常的に観測を行う定点観測業務は、苛酷な環境のなかで、さまざまな成果を上げた。気象衛星ひまわり等の誕生によってその役目は終了したものの、台風災害軽

減への努力はいまなお受け継がれている。

貴重な資料や興味深いエピソードを交えて書かれた本書は、専門家のみならず多くの一般の人たちにも楽しんでもらえるだろう。そして、こうした過去の努力を風化させないことが、将来の防災につながっていくに違いない。



四六判/160頁/定価1,680円(5%税込)/発送費360円
発行：〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51 成山堂ビル

株式会社 成山堂書店

TEL：03-3357-5861 FAX：03-3357-5867

<http://www.seizando.co.jp>

e-mail publisher@seizando.co.jp